

## 第1回学都松本・教育100年を語る会講座

平成30年5月27日（日）

あがたの森文化会館2-8教室

おはなし：重要文化財旧開智学校学芸員 遠藤 正教さん

### 【① 100年前の子ども達のクラフト】

重要文化財旧開智学校の学芸員の遠藤と申します。今日はよろしくお願ひします。

今会長さんのお話にもあったとおり、今日が初回になるのですが「学都松本・教育100年を語る会」ということでスタートするものです。「教育100年を語る会」という、非常に大きなテーマですが、皆さん「100年後の未来」をどのように想像されますか。100年後どんな学びが行われているか、想像できますか。ちなみに100年後の2117年にはすでにドラえもんは誕生しているそうです。2112年にはドラえもんが大量生産されていたそうなので、100年後の未来にはドラえもんみたいな夢のようなロボットも誕生すると考えられています。ただ、明日もどうなるかわからないのにいきなり100年後を考えろと言われても非常に難しいと思うので、そこはまずこれまでの歴史をふりかえってみて、これまでの100年どういうふうに行われてきたのかということ振り返りながら明日からの100年を考えていこうという意味も込めて、初回は旧開智学校の方でお話をさせていただきたいと思ひます。今日は2回に分かれていまして、これからお話しするのは「100年前の子どもたちのクラフト」、10分ほど休憩をはさみまして「100年前の先生の言葉」をお話ししていきます。

では、これから内容の方をお話しさせていただくのですが、そもそも「学都松本」は皆さんどこかで聞いたことがあると思ひます。松本市は三ガク都「岳都」「楽都」「学都」をアピールしていますが、このなかで「学都」は、一般的には何をやっているのか分かりにくいというイメージを持たれがちです。これを換えようと「学都フォーラム」の動きも始まっていますが、そもそも「学都」とはどのようなことなのでしょう。皆さんのお手元に「学都松本をめざして」というリーフレットがありますが、そこに『学都』とはどういった概念なのか、『学都』をめざしてこれからどのように活動していくのか」ということがよくまとめられていますので、あとでご覧になっていただければと思ひます。この「学都松本をめざして」という今後の方針のなかで、「育てたい力」というのがいくつか挙がっています。「自ら学び、考え、想像する力」「主体的に行動し、挑戦する力」「我慢する力」「やり遂げる、粘り強さ」「コミュニケーション力や命の大切さ、

思いやりの心をもつこと」「情感豊かな心・人間性」「確かな学力、健康・体力」ということが、「学都」として育てたい力として挙げられています。今挙げた「主体的に考える」「コミュニケーション力」「命の大切さ」といったものを育てることがどういった姿を目指しているかということ、2013年の広報誌に「『学都』とはこういうまちだ」ということが載っているのですが、そのなかで「学ぶことは生きること、よく学ぶことよく生きることだ」というような言葉が書かれています。先ほど述べた「学都松本をめざして育てたい力」のなかに挙がっていることも、「こうした力を育てるということはよく生きることを目指す」「良く生きるためにはこういった力が必要です」ということを指していると考えられますので、「学都松本」は「学」の文字が付いていますが、大まかなイメージとしては「どうやって良い人生を送っていくか、良い人生を送るためにどうやって学んでいくか」ということが大事になってくるのかなと思います。よく「学都松本」のPRポスターに旧松本高校や旧開智学校が出てきます。今画面に出ているのは、明治40年に当時の生徒さんが描いた開智学校の絵です。「学都」の象徴として旧開智学校や旧松本高等学校を挙げていただくのですが、松本の人たちは昔から教育の環境を整えることに惜しみない力を注いできたこと、そうした積み重ねがあって今「学都」であるということが一つ言われていますので、よく象徴として使っていただいています。しかも旧開智学校には江戸時代から現在に至るまで10万点を超える教育資料があります。この中には明治時代の職員会議や子どもたちのテストの答案も残っています。100年前にどんな教育が行われて、どんなことを子どもたちが書いていたのか、そうした実践のレベルまでわかるということで、まさに「学都」の象徴として扱っていただいています。旧開智学校というのは「昔の学びの宝庫」と言われていまして、「日本一の教育実践資料を持っている教育博物館」という評価を一般に頂いています。日本全国、北から南まで、研究者の方や一般の方も多いのですが、さまざまな方が昔の学校のことを調べに訪れてくれます。この前いただいた質問は、「昔の子どもたちの並び順、出席簿の書いてある順はどうなっていたのですか」というものでした。この前NHKで流れたそうなのでご覧になった方がいるかもしれませんが、「日本人のお名前」という番組で「成績順に子どもたちが並んでいた」という話を調べに来てくれました。実際、開智学校には生徒の出席簿が1000点近く残っていますので、明治から昭和まで、子どもたちがどのように並んでいたのか調べることができます。実際には、成績順であったり、名前順であったり、バラバラであったり、と一様ではなかったのですが、テストの成績順に並んでいる名簿もあったので、そういうこともあったのだなということで番組の人達は帰っていきました。このように昔の教育のことがわかる施設ですので、全国からも注目されています。その教育資料の中に、今ご紹介しているような絵や子どもたちの絵・作ったものが

たくさん入っています。ちなみに昔の開智学校の子どもたちが描いた絵は、明治14年ころから昭和18年ころまでのものが全部で1万点以上残っています。そうしたもののなかから、今日は「100年前の子どもたちのクラフト」ということで昔の子どもたちが作っていたものを紹介しながら、当時の教育について少しお話をさせていただきます。

「レジュメ2 クラフトの入り口 図画工作」ですが、今日会場で行われているクラフトフェアと関連したおはなしをしてほしいと言われたときに思いついたのが図画工作です。今小学校ではきちんと時間が持たれていて、おそらくほとんどの人が小学校で図画工作の時間に粘土や紙を使って何か作品を作った経験があると思うのですが、そうした授業の経験というのがクラフトの入り口になる人も多いのかなということで、今日はこの話を軸にすすめていきたいと思います。

現在は「図画工作」という名前ですが、昔は「手工教育」と言われていました。この手工教育が誕生したのは明治19年と言われています。近代的な小学校ができたのが明治5年ですので、それから14年後に手工教育が法令で定められています。この手工教育を始めた人、創始者と言われているのは松本ゆかりの人物でした。上原六四郎さんという方で、生まれは江戸ですが父親が松本出身だったそうです。この方は開成学校(現在の東京大学)でフランス語を勉強したのち陸軍の士官学校に入学し、気球を作って自ら乗ってみたという方です。西南戦争で使うために気球を作って持って行ったそうなのですが、この方が後に図画工作の生みの親となります。クラフトフェアで盛り上がる松本で、関係する人が図画工作の創始者というのも何かの縁なのかなと思います。この手工教育は、明治の半ばから始まって徐々に広まっていくのですが、実際にどんなものを作っていたのかご紹介します。開智学校には、生徒の作品とともに教案も残っていますので、そうしたところも少しご覧いただきたいと思います。

レジュメの続きに少し付けてありますが、これが原本の画像です。図画と手工の教案で、どうやって教えていたのかということを書いたものです。これは図画のところなのですが、日本的な家屋の絵をどうやって描くのかを、「私はこうやって教えます」ということを書き留めたものです。上に絵が描かれていて、家の絵を描くときにはこのようなイメージで先生は準備していたと思われる。一方こちらは生徒が描いたものです。先ほどの教案の絵と比べるとそっくりで、こうしたものが同じクラスで何枚も残っているの、図画の授業においてみんながこれを描いていたということがわかります。こちらは桃と栗の粘土細工で、現物はないのですがこうしたものも教えていたということがわかります。こちらはまた図画になるのですが、上に「素材 猫」とあり先生の絵が描いてありま

す。先生たちがこのように猫の絵を教えたいという教案が残っていて、実際に子どもたちが描いた絵も残っているということで、図画教育や手工教育がどのように行われていたのかがわかります。これは大正時代の教案と絵なのですが、このころは自由に描く気風も生まれています。これは3年生の子が描いた金太郎の絵で、ほかにも風景画などがあります。見ていただいてわかるように、当時の子どもは非常に絵が上手です。手工でいろいろ物を作ることにも上手だったと思うのですが、残念ながら作ったものは残っていないので絵を見て推測するのですが、非常に上手です。大人が描いたと言ったら信じてくれるほどなのですが、昔の子はお手本通りに正確に描くことに長けています。もちろん少し面白い絵もあったりします。みんながみんな上手だったということではないのですが、相対的に少し下手だなと思う子も、今の子と比べたらかなり上手に描けています。これは3年生の子の絵で、お手本通り正確に書いたものだと思います。昔の手工教育や図画教育は、お手本通りに正確に教えることが重視されていました。最初の出発点は職業訓練で、正確に製図をする必要があったため、小学校のころから教え込むというのがありました。なので、今見てきたように小学生の絵ですがとても上手です。当館に飾っている絵を持ってきました。今の中学1年生くらいの子が描いた開智学校の絵ですが、大人が描くような非常に達筆な絵で、こういったものがたくさん残っています。これが明治・大正時代の子どもたちが描いた絵です。このようにして、100年ほど前は、図画や手工をするときはとにかく正確に描くことが重視されていました。それに到達するためにものすごい数の反復練習をこなしているのだと思います。対象を正確に眺めるところから始めて、手をイメージ通りに正確に動かすことができるようになるまで、非常に練習を積まなければならないと思います。開智学校に残っている資料に「教室日誌」というものがあり、その日どんなことを教えたか先生が記録に書いて残しているのですが、明治20年代頃のものに、習字の授業で「今日は『一』の漢字を教えた」としか書いてありません。ということは、50分くらいの授業でひたすら「一」の漢字を繰り返し書いていたと考えられます。こういった感じの授業が一年間ずっと続いていきます。次の授業は、前の授業の復習でまた「一」を書いて、復習で1日終わることもあります。その次の週もまた別の漢字を書いて、というようにとにかく繰り返し練習をしていたことが教案からわかります。こうして積み上げた努力、練習の成果が絵になって残っています。おそらく粘土細工や手工に関する作品も非常に精巧に作られていたのではないかと思います。

次にレジュメの「何を学んでいたか」というところになるのですが、また少し視点を変えて「手工教育では何を目的としていたか」「当時教育者などはどういったことを手工教育に求めていたのか」ということを少しまとめてみました。

「現実と理想」という形でまとめたのですが、「現実」は基本的に法令で定められた手工教育の目的を、「理想」は当時の研究者・教育者が手工教育とはこうするべきであるといったものをまとめたものです。各年代でまとめていきますと、対比ができて面白いと思いましたので、ご紹介いたします。

最初の「現実」の方ですが、これは「小学校教則」という法令に書かれた手工教育の目的です。「眼及び手を練習して簡易なる物品を製作する能力を養い、勤労を好む習慣をつける、実業発展の基礎になるように」といった言葉が書かれています。同じ20年代の「理想」の方ですが、これは「信濃教育雑誌」に佐藤虎太郎先生が書いたものです。「目と手を通じて人間の諸能力を開発し道徳的諸習慣を啓培、経済的に考えるべきではない」といった論説を載せています。明治22年に外国の研究者の方の論を翻訳して紹介したのですが、法令には「勤労を好む習慣」という言葉が入り、研究者・教育者は「経済的に考えるべきではない」という言葉を残しています。明治19年に手工教育が始まって実際に学校の現場で行われていたことの多くは、例えば封筒を作ったり、生活で使えるものを授業で作ったりして、それにかかるお金を浮かせていたようです。そのため手工教育はあまり盛りあがらなかったといわれています。研究者・教育者が「経済的に考えるべきではない」と書くということは、実際には多くの人が経済的に考えていたという背景があります。

次の明治30年代、明治33年の小学校令には「簡易なる物品を製作する能力を伸ばし、勤労を好む習慣を養う」とあり、少しシンプルになりましたが基本的には変わっていません。対して、信濃教育雑誌に載った論説には、「感覚を鋭敏にし、観察を精緻にし、想像力・思考力・注意力を養い、美的倫理的感覚を養う、筋肉の動きを自由敏活にする」ために行われるべきである、といった意見が書かれています。この後もそうなのですが、法令は勤労・実業を軸にして進んできます。それに対して研究者の人たちは「手工教育とはそういうものではない」といった論説・意見が続いていきます。明治40年代の法令を見ても「簡易なる物品を製作する能力を与え、工業の趣味を増し、勤労を好む習慣を養う」とあり、小学校の高学年の子には製図の授業も誕生していたようです。対して、理想・研究者の意見としては「製作の結果ではなく、その過程が大切である、手工科の本領は自発的に自己表現ができることであり、説明や例示が細かすぎる、児童を自由に活動させるべき」といった意見が書かれています。これは、上原六四郎さんとともに手工教育の創立に関わった岡山秀吉さんという方が、文部科学省から頼まれて長野県を始め全国の手工の授業を実際に視察に回って、長野県の視察報告の中で述べたものです。「現在の長野県の手工教育は先生の例示が細かすぎる、児童をもっと自由に活動させるべきだ」ということを述べています。大正時代以降も、法令の方は「実業において工業を学習する児童に課すことが可能」という

条文とともに高等科では必修化となるのですが、目的としては「勤労を好む習慣」というのは基本的に変わりません。大正時代には「大正新教育」という「児童の個性を大事にしましょう」「児童の自然な感覚を大事にしましょう」といった教育がこの時代流行るのですが、そうしたなかで手工教育にも芸術的要素が必要なのではないかということ提唱した方がいらっしやいます。最後に戦中期、戦争が始まるとこうした理想の意見は確認できず、現実として法令は「産業戦士の育成」というところに収束してしまいます。

今までご紹介したように、基本的に法令で定められるものは「勤労の習慣をいかにつけるか」「勤労の習慣をつけて工業的な趣味を養って、いかに経済発展の下地を作るか」といったところが軸となっています。それに対して研究者の人や現場の教育者の人たちは「子どもたちの創造力・思考力を養って、美的感覚や自由な表現力を大事にするべきではないか」という点が各時代において常に主張されています。どちらも大切ではあると思いますので終始意見が交わされるのですが、一般的な法令というのは広く全ての子どもを対象にしたり国の政策が入ってきたりしますので、非常に固く現実的な内容になっています。それに対して現場の先生や研究者というのは、もっと子ども一人一人に目を向けて改善したいという主張が各時代においてなされています。

そんななか、開智学校では実際どのような授業が行われていたのでしょうか。先ほど作品などを紹介したのですが、大正・昭和時代になると、開智学校独自で「手工科ではこのようなことをやります」といった細目が作られます。これが表紙の画像なのですが、全て先生の手作りです。分厚い本で200ページほどありますが、目的から始まり、各年代・学年・学期でどういったことを教えるかということが細かく決まっています。「手工科細目大正8年度」はこれ以前にあった細目を修正したもので、この資料によると手工科の細目の目的は、「従来の細目はあまりにも形式的・進度表的にて活用されない恨みがあったので、今回はそうしたことに陥らないよう命ある細目になるように改訂しました」と書かれています。同じ行の上の段、一番左には教則も書かれており、「手工は簡易なる物品を制作するの能を得しめ、勤労を好む習慣を養うを以て要旨とする」とあります。実際は、こうした教則に公立の小学校は縛られるのですが、先生は「あまりに形式的に陥らないように、もっと命ある活用できる細目にしたい」ということで、自分たちで教え方の修正・改善を行っています。ただ、あくまで公立の小学校なのであまりにも外れたことはできません。実際に明治40年頃の開智学校の職員会議録に書いてあるのですが、当時、美術・図画の先生が外に出て風景の写生ばかりさせていることが問題であるという会議が行われています。その産物となるのがこの浄林寺の絵です。M ウィングの裏にお寺が残っているのですが、開智学校は当時M ウィングの隣にあったので、すぐそこではありますが、開智学

校では明治 30 年代にこうした風景写生がよく行われていました。明治 30 年代だけとびぬけて風景写生が多くなっています。これはおそらく、図画の先生が自分の判断で、教科書の絵ばかり描かせるのはつまらないということで、外に出て風景の写生を多くさせていたということに関係があるのですが、それから 10 年ほど経つと職員会議で問題となり、「風景写生ばかり行っているため図画で最も大切なお手本通りに正確に描く能力が低い。なので、風景写生は止めて教科書の絵を描きうつす練習だけをした方が良い。」という意見が出ています。このとき風景写生を勧めていた先生が亡くなったこともあります。実際明治 40 年代以降、子どもたちの絵で残っているものは教科書のお手本の絵を描き写したものがほとんどになっています。時代によっては「外に出る方が良い」「もっと自由に書かせよう」という意見があるのですが、大きな流れとしては法令に定まっているものに収束していきます。こうしたことが 100 年前の図画・手工の教育として行われていました。

最後に、明治と昭和の絵の比較をしたいと思います。明治 30 年代は、風景の絵が盛んに描かれていたため風景画が中心となります。ここに開智学校・松本城の絵がありますが、周りにほとんど何もない様子が絵として残っています。

#### 【さまざまな絵の紹介】

続いて昭和の絵です。昭和 18 年に書かれたこのポスターには「スパイ禁止」とありますが、当時は戦争中なので、子どもたちは戦争の絵をたくさん描いています。意味合いも大事ですが、おしゃれ・構図が上手であるということで現在展示室にも飾ってしまっていて、やはり技術の高さがわかります。これは 3 年生の描いた絵で、当時は軍艦や戦闘機といったものがよく描かれています。これは「海や空ハ僕等の行くところ」という言葉とともに絵が描かれています。

#### 【さまざまな絵の紹介】

今ご覧いただいた絵の多くは 6 年生が描いたもので、明治時代のものと比べると描き方が大きく変わっています。明治時代は、とにかくお手本に正確に、細かいところまで描きこもうという姿勢がみられます。昭和になると、色を多用するようになったということもあり、そこまで細かくは描かなくなります。これは大正時代に画期がくるのですが、「大正新教育」のなかで「児童の個性を大事にしましょう」「子どもの感性を大事にしましょう」という運動が起こり、絵や手工教育の改革が叫ばれるようになります。「もっと自由に書かせればよいのではないか、その方が子どもの感性が養えるのではないか」ということで、次第に細かく絵を描くことを重視しなくなっていくます。これは当時の教え方や教育の風潮に起因するのですが、それが進んだのが、現在旧開智学校で常設展示している平成の子どもが描いたこの絵です。それぞれ 5 年生と 1 年生が描いた絵で細

かいところまで描きこまれていて上手なのですが、明治時代の絵と比べるとバランスが少し悪くなっています。おそらく強い印象を受けたものを中心に描いた結果、周りのものが斜めになってしまったと思われます。現代の絵は、自分が感じたことや思ったこと、強く印象に残ったことを中心に描かれている印象を受けます。昔の子は細かいところまで正確に描くということが求められていて、現代の絵と比べると描き方そのものが違うように感じます。「しっかり描かせるか、それとも自由に描かせるか」という、教え方や絵の教育の仕方によって変わってくるのですが、明治・昭和・現代で上手さのベクトルが異なると思います。どちらも大切だと思いますが、少し前にニュースで「大学1年生が入学してまず高校の復習から始めていて、本来研究など高度な学問をする場である大学で高校の復習をする状況を大学教員が嘆いている」という話を聞きました。昔の子も、正確に描く技術を追い求めると個性がなく面白くないと言われ、反対に個性を大事にしようと面白い絵ばかり描いていると技術がないと言われます。実際、明治末期の職員会議で「外の風景ばかり書いているから正確に描けなくなっている」という意見があったように、片方を追い求めるともう一方は欠けていると指摘を受けてしまいます。どうしたらよいか考えましたが、私にはわかりませんでした。今教員がとても大変だという話はさまざまところで流れていて、授業の時間も勉強をすることが多すぎて足りないと言われているのですが、ではどうしたらいいのでしょうか。これを考えるのがこの講座の趣旨なので、答えは言わず皆さんで考えていただけたらと思います。

【おはなし終了後、参加者からの質問】

【質問①】

粘土細工は現物があまり残っていないとのことですが、それは絵画に比べて残しにくいからなのであって、製作の記録はそれなりにあったということでしょうか。法令の方は「物品を製作する」とあるので絵画だけではなかったと思うので、もし分かるようでしたらお願いします。

【回答①】

旧開智学校には、折り紙の手工作品が残っています。おそらく、かさばらず残しやすかったからだと思います。絵もそうですが紙の物は残しやすかったと思います。粘土細工や椅子、竹で作ったハンガーなどが記録にはあるのですが、そういったものは家に持ち帰って使ったか、粘土は崩すので残しにくかったと思います。学校に立体物を収納しておくスペースも少ないので、紙の物は残り、それ以外は残っていないという状況です。

また、法令上では手工教育というものはあまり重要視されておらず、途中まで選択科目・随意科目という扱いで、大正末期～昭和にようやく高学年で必修化と



なりました。その中で目的としては「物品」「勤労」「工業」という文字だけではありません。法令上は「図画」「手工」と分かれているので、図画の方には美的感覚が入ってくるのですが手工教育は非常に固い内容で法令が定められています。

#### 【質問②】

明治30年代に風景画を描かせたというのは少し驚きました。大正期に自由画運動があったと思うのですが、それと何か関係があったら教えていただきたいです。

#### 【回答②】

長野県出身の山本鼎さんという方が大正時代に自由画運動というものを始めて全国に広まっていきます。「教科書の臨画、お手本通りの正確な絵ばかり描くのは面白くないから、自然の中に入って子どもたちに自由に描かせよう」というのが自由画教育なのですが、開智学校の明治30年代の動きは自由画教育とは特に関係はありません。時期のずれもありますし、大正時代の開智学校では外に出て自由画を描くことは少なくなってきました。明治30年代に開智学校で風景画が流行ったというのは、明治30年初頭にイギリスの師範学校で先生をしている女性が全国で講演をしていて、そのなかで自然に学ぶ実地観察を大事にする理科の授業をすすめるということで、実際松本にも来て師範学校で講演をして開智学校の先生も聴いていたそうなので、そうしたところから明治30年代だけ特別に風景画が増えたと思われます。理科の授業でも実地観察が多く行われていて、お寺に牡丹を見に行く、城山の方に登って自然を見るなどの動きが盛んでした。

## 【② 100年前の先生のことば「最近の若者は元気が無い！」】

2 時間目は「100 年前の先生のことば」ということでお話させていただきま  
す。100 年前の先生の言葉、そして当時の教育の様子を紹介するというこ  
から始めていきます。また、私が開智学校に異動して 5 年が経ちましたが、さま  
ざまな教育資料を見ていくなかで、昔の先生はすごいなと思うことが多々あり  
ました。そうした、私が感動したことをご紹介できればと思います。

1 つ目は、タイトルにもあるように「現代の学生は…単独には実に意気地のな  
いように見える」というところから始めたいと思います。この言葉を言ったのは  
澤柳政太郎さんで、成城学園を作った人、京都大学で全国的な大学自治に関する  
問題を起こした人として有名です。松本市出身で、文部次官や東北大学・京都大  
学学長を務め、民間に下ったあとは成城学園を作り「本当の教育とはなにか」と  
いうことを生涯追い求めました。この方は非常によい言葉をととても多く残して  
います。数が多いので別紙を付けました。これは以前、澤柳政太郎の展示を行っ  
たときのものなのですが、澤柳先生が 100 年前に言った言葉を多く載せていま  
す。「また現代の学生は相集まっては衆力をたのんで多少の元気を示すけれど、  
単独には実に意気地のないように見える。真に元気ある学生は千万人に対しても  
吾れ独り往かんとする概がなければならぬ。要するに徳義に適い道理に合す  
ることは忌憚なく堂々とこれを主張することがあって欲しい。これを主張する  
と同時に、いやしくも道理に対し徳義に対しては絶対に服従する覚悟がありた  
いものである。」これはなんと大正 4 年の言葉です。100 年前には既にこのよう  
なことが言われています。澤柳さんがこのようなことを言った背景には大正デ  
モクラシーや時代の背景があるのですが、そのことについては下の方で「デモク  
ラシーの高潮さるる今日の世の中では多数ということが力である。多数は必ず  
しも道徳ではない。道理でもない。国政も公共団体の仕事も多数が第一である。  
これは一人の専制よりも過が少ないというまでである。道理と道徳の行わるべ  
き学校には多数は価値少ないものである。」といった考えのもと、元気ある学生  
は千万人に対しても自分で向かっていく気概が必要であるということを述べて  
います。非常に耳が痛くなり、「あなたは言えますか」と聞かれたら言えそうに  
ないのですが、これを展示室に飾っておくとみなさん非常に感心されていきま  
す。むしろ「100 年前から変わっていないんだな」と笑っていきます。今でも  
通用するような言葉ではないかと思うのですが、澤柳先生が残した言葉はどれ  
も、100 年前に言ったとは思えないほど力のある言葉です。「子供を子供として  
の教育」という論説で述べた言葉なのですが、「大体論としては、その子の天分  
天稟をなるべく故障なく順当にのばすことができれば幸いである。幼少の時か  
らその神経を痛く緊張させ、種々の外部的刺戟(しげき)を与えて過度の勉強をさ

せ、苦悶(くもん)あっても自ら訴うるすべを知らない可憐の児童を苦しめ悩ますことは是非避けたいものである。—どうぞ子供を子供として考えて貰いたい。」これも大正10年の言葉です。澤柳先生がすごいのは、これを書いたときはもう40~50歳で事務次官を務めているのですが、終生一貫して、子どもに対して敬意を払い尊敬のまなざしをもっているということです。敬意をもっていてもできないことが多いと思うのですが、「どうぞ子供を子供として考えて貰いたい」という言葉は胸に響きますし、まったくその通りだなと思います。これをさらにすすめた言葉が「本当の教育とは人間の本性と申しましょうか、児童の天分、さらにおつかしく申しますれば各自の持って生まれた特性才能を啓発して行く所にあると存じます。—しかし今日の教育は大人が大人の考えを以て、これも必要である、かく為すべし、かく為すべからず、ときめたものを児童に要求しすぎる嫌が極めて多過ぎると存じます。理想を組織的に哲学的に構成することはおつかしいが、砕けて申して見れば、立派な人、善い人、正しい人、親切な人になることです。世のため人のため邦のため人類のために考え行う人となることに異説はない。—私共はこの目的を達するのに、自然的の方法、児童の本性特性に教えられなければならぬと信じてやっておるのです。」というものです。昭和2年の当時、「今日の教育は大人が大人の考えを以て、これも必要である、かく為すべし、かく為すべからず、ときめたものを児童に要求しすぎる嫌が極めて多過ぎると存じます」と述べる人は少なかったと思います。

少し話は逸れますが、子どもはすごいものです。私には2歳の子どもがいますが、最近かくれんぼを覚えて、毎日「かくれんぼしよう」と言ってきます。最初は後ろを向いて自分の顔を隠して「もういいかい」「もういいよ」と自分で繰り返しているだけだったのですが、あるとき親に「隠れて」と言うようになりました。私は「ひとつ進んだな」と喜んで隠れに行ったのですが、いつもは「もういいよ」と言うと足音が聞こえて探しに来てくれるのですが、この日は「もういいよ」と言って30秒、1分経っても足音が聞こえてきませんでした。「おかしいな」と思って覗きに行ったら、冷凍庫を開けてアイスを取り出してスプーンを持って立っていました。「パパ隠れて」と言って親をどけて、静かに冷凍庫を開けてアイスを取りだし、スプーンを持って食べようとしていたのです。急いで取り上げましたが、子どもってすごいなと後で思いました。親が教えたのは「アイスはおいしい」ということだけだと思います。少しあげたら喜んだのでいい気になってあげたのですが、そのとき「アイスはおいしい」と思って、今度は友達とかくれんぼを覚えてきて楽しいからやっていた、と。あるとき「アイスが食べたくなったらけれどあまり食べすぎると親に取り上げられるから親は邪魔だ、どうやったら親を自分の目の前からどけることができるのか」と考えた時にかくれんぼを利用したと思うのです。そんなことだとはつゆ知らず、私はいい気にな

って難しいところに隠れて待っていたのですが、34歳が2歳に完全にしてやられました。私が教えたのは「アイスはおいしい」ということだけだったのですが、いろいろな自分の経験を組み合わせて自分の目的をやり遂げたということで、子どもは本当にすごいなと思いました。澤柳さんも、「子どもはすごい」ということを生涯思い続けて実践してきた人だと思います。

澤柳さんの思いが一番現れているのが「小学教育の特に必要なわけ」にある「もし小学校で此の自学自習がよく行はれて児童に自学自習する力と、其の精神習慣が養成されたなら、中等教育や高等教育は別に学校を設けず、生徒が自学自習して行けばよい。もとより自学自習の為に図書館とか博物館とか実験室とかの設備は入るであらうが、今日の所謂学校は入用でなくなる。…かかる時代が来ないに限らない。否その来ることを希望せねばならぬ。」という言葉です。「子どもたちが自分で学び、考え、行動する習慣・精神を養うことができたのであれば、中学校や高校は必要ない」ということを言っています。最初に読んだときはとても驚きました。今言っても論争が起こるような刺激的な言葉なのですが、子どもに敬意をはらい子どものために終生働き続けた澤柳さんならではの言葉だと思います。実際は100年経った今でも中学校は義務教育ですし、高校も90%以上の子が行くようになっていきます。大学も多くの子が行くようになり、「学校」というものは今でもしっかり続いています。澤柳さんが100年前に「こういうことを希望していた、こういう時代にしなければいけない」と言ったこの言葉は、現在も考えてみる価値があると思います。よくよく考えたら「今ある中学校・高校を全部やめて、あとは子どもに勝手に学ばせよう」など、とても怖くてできないかと思うのですが、「こういうことが必要である」ということを、教育雑誌に投稿してまで訴えています。これが大正10年の言葉です。

次の言葉も印象的でした。「将来の平和は教育者の努力如何にあると云ってよい。…人類は兄弟であるといふこと、各国は一つの家族を為しているといふことを力説することが大切である。一各人は良き国民であると共に良き世界国民でなければならぬ。国家主義は国際主義に調和されねばならぬ。愛国主義は人類共愛主義と調和されねばならぬ。一国際主義と調和されない国家主義は斥けなければならぬ、他国を眼中に置かない愛国主義は拒否しなければならぬ。」これは昭和2年の言葉です。澤柳さんはこの年にお亡くなりになってしまうので実際に戦争の時代は生きていないのですが、もし戦争の時代に生きていたらどんなことを言っていたのか非常に気になるところです。レジュメ裏側の右下は教師に向けた言葉で、「『教師も学生なり』といたい。教うるは学ぶの半との諺は吾等を欺かない—どうぞ日々の実験や日々得られるたくさんの材料を充分利用するようにしたい。教師は学生である。実験しつつあるものである。日々研究しつつあるものであるということを実現したい。」ということを述べています。

澤柳さんは実際に行ったこともすごい人で、例えば小学校を6年制に定めたのは彼です。明治40年まで義務教育は4年間でしたが、彼が文部省にいるときに小学校の義務教育を6年に延長しました。また、小学校を基本無料化したのも、国語の授業を作ったのも彼です。つまり、小学校に通った人は皆澤柳さんにお世話になったとすることができるくらい、澤柳政太郎さんは現在の教育の基礎を作った人と言うことができます。教育書のなかでは非常に有名な方なのですが、地元では知らない方も多いため、開智学校の卒業生である澤柳政太郎さんのことはもっと広めていかなければならないと考えています。

2番以降は全て、開智学校の先生の言葉です。

2「彼等多くの子守児童をして生涯無教育に終らしむるは実に惨酷、教師は最も同情を以て親切に之を導き世に子供の大切なること愛すべきことを知らしめ教育者自身も範を示して之を導かざるべからず」。明治30~40年代の先生の言葉です。「子守教育」というのは、開智学校をはじめ全国の学校で行われていたのですが、写真を見ると、勉強する女の子の横に幼い子どもがいますが、この女の子は赤ん坊を背負って勉強しています。この子たちは、家庭が貧しいなどの理由で他の家に子守の仕事に出ている子どもたちです。この子たちは昼間学校に行けず義務教育すら受けられない状況だったのですが、全国でこうした子どもたちをなんとかしようという運動が盛り上がり始めます。開智学校では明治31~32年頃にかけて大学を卒業したばかりの若い先生が始めたと言われていました。この子守の子どもたちは、放課後校庭に忍び込んで子守の赤ん坊を引き連れて遊んでいたそうです。それを見た若い先生が、試しにこの子たちに読み書きや歌を教えたことが「子守教育」の始まりと言われていました。すぐに評判になり、年間60~100人の子どもを受け入れて勉強を教えていたそうです。しかし、2年間通い就業期間を終えて卒業できたのは10人程度、全体の1~2割だったと言われていました。こうした子守教育の中で先生が書き残した言葉がいくつかあるのですが、子守教育をするにあたってまず先生がしなければならないこととして、「子守をする子どもとのコミュニケーションはもちろん、子守の子どもが背負っている赤ん坊との親交を深めなさい。先生の顔を見て泣き出すようだと授業が進まないので赤ん坊にもしっかりコミュニケーションをとりなさい」と書かれています。そのまま続きにある言葉なのですが、「彼ら子守の家庭の多くは冷酷にして温情に接することがない家庭が多いので、教師の親切は他の生徒に比べて一層深く感じ入ることがある。それを心に留めて子どもに接しなさい。特に、世の逆境に立ちて、世を恨み人を妬む心は生まれてしまうものであるが、その心を和らげて温情をもってよく導けば必ず良い結果になるので、それを目指して子守教育を行うように」という言葉が書かれています。これは先ほどの澤

柳さんと比べれば、歴史上に名も残らない一般の先生の書いたものなのですが、非常に良い言葉、印象に残る言葉だと感じます。子守の子どもたちの言葉も残っていて、これは毎年卒業式で読む答辞なのですが、「私どもは人並みに学校へ出ることができず、父母のそばを離れて奉公する不幸せな者ですが、幸い子守学校へ入れていただき読み書き漢字を読むことはもとより、女子の道、子どもの取扱いまでも教えていただきまして、懐かしい父母兄弟に便りもできるようになりましたのは、まったくご主人と先生のおかげでございます。そして今日、この式場において免状をいただきまして、このうえもない嬉しいことでございます。なお一層勉強してご恩に報いたいと思います。」ここに「懐かしい父母兄弟」とありますが、子守の子どもたちは県外出身の子もたくさんいました。松本の子守教育は有名になっていったという話がありまして、実際名簿には名古屋、岐阜、富山、新潟といった近隣の県から松本に働きに来て開智学校の子守教育所に入学したということが書かれていました。「松本に子守の仕事をしに行けばなんと勉強を教えてもらえるようだ」ということが当時非常に有名になっていたようです。若い先生の自主的な取り組みによって始まったというのが当時ならではの事情で、昔は今ほどカリキュラムや学校の内容について法令で細かくは定められてはいませんので、大部分が先生の研究や実践によっています。これから紹介するものは、開智学校の先生が外国の本を読んで「取り入れよう」と実践し始めたものがほとんどです。「成績不良児学級 児童調査簿」というものもその取り組みの一つなのです。これは日本で初めて行われた能力別の学級編成ではないかと言われていて、開智学校では明治23年に始まりました。当時すでに学年内での学力差が問題となっていたようで、試験の成績順に並べて上から順に一クラスずつ作っていき、成績が低い子たちが集まったクラスにはその学年で最も優秀な先生を担任にして学力向上を図ろうという取り組みを明治23年に始めています。これは長野の早晩塾学級と並んでおそらく日本で初めての取り組みであると評価されています。明治時代の開智学校の先生が東京の教育の研究会に出席したら、「開智学校で成績不良学級をやっているが、これは我が国特殊教育のはしりである」という紹介をされて驚いたという記録も残っています。

こちらは女の子たちが並んで勉強している様子なのですが、この中に髪を結って勉強している子がいます。この女の子たちは、現在も残っている裏町の料理屋で修業していた子たちです。この子たちは昼間に仕事や修行をしているため学校に来られないということで先生たちが立ち上がり、裏町の料理組合の人達と話し合いを重ねて、裏町に学校を作りました。最初は民家の転用をしていたのですが、昭和の初めにはついに校舎を作って「裏町特別学級」という取り組みをしています。明治30年以降、就学率は全国で90%を超えていくのですが、それでもまだ学校に通えていない子がいたので、そうした子どもたちをいかに学

校に招いて教育を教えてあげられるかという取り組みは盛んに行われています。子守教育も放課後に行われ、裏町特別学級は飲み屋街に学校を作りました。でっち奉公しているこの男の子たちには夜に学校を開けて、仕事が終わった子どもたちを集めて勉強を教えていました。このように開智学校では、さまざまな事情をもった子どもたちに対するケアというものが盛んに手厚く行われていました。そうしたところが「生涯無教育に終らしむるは実に惨酷」という言葉を生んでいます。

次に3番ですが、「流行気分になり教育の本末を顛倒する嫌いはあるまいか」という先生の言葉が残っています。これを書いたのは小岩井君人先生という方で、開智学校の校長先生を務めた方なのですが、この方は一般教員のときに「林間保育」という取り組みを始めています。そのときの報告書に書かれた言葉が、「流行気分になり教育の本末を顛倒する嫌いはあるまいか。徒らに欧米教育の総べての形式だけ模して、主眼を没し、其の土地の風土、市街の広狭、発展、…運動場の有無如何を忘却しての施設は贅すべきではない。～徒らに組織立て形式を尊び欧米林間学校の縮図に習う弊は共に警醒すべきである。」というものです。これは林間保育の写真ですが、子どもたちが林の中でござをひいて寝ています。真ん中に掛けられているのは「教育掛図」で、先生が歴史の話をするときに用いたものです。これは、夏休みに病気がちな子どもたちを毎日集めて森に連れて行き一日中遊ばせるという取り組みで、健康的な子どもになるようにと小岩井先生が始めたものです。当時夏休みには登山や修学旅行といった学校行事が入っていたのですが、病気がちな子についてはいけないのでその救済も兼ねて行われています。この小岩井先生は非常に研究熱心で、ある年林間保育でハンモックを使ったのですが、報告書には「あれは見た目だけで、揺れすぎて子どもは気分が悪くなり使い物にならなかった」と書かれ、翌年からは使われなくなりました。このように、一つ一つ実践しながら研究をしていきました。この林間保育については、小岩井先生が非常に膨大な報告書を残しています。そのうちの 하나가この「林間保育の実際」という分厚い報告書になるのですが、この報告書の冒頭にあるのが、先ほど述べた「流行気分になり教育の本末を顛倒する嫌いはあるまいか」という言葉です。ほかにもいろいろな言葉があり、林間保育の効果の見方について書かれた「この林間保育の成績を語るに至っては、1・2年の経験で成績の発表は早すぎる」といった言葉とともに、「ものの観察とか研究をするときに外部的・内部的にとられることがあります。すなわち、ものの概念をきれいに見ると本質までいたって美しく見え、また、前もっていい評判を聞かされていると心によく感じられ、公平に認識することができない場合が多い。林間保育もよいと信じすぎて実施すれば、全てが効果あるものと目に映ってしまう。しかも

その発表に、早まって数量・統計に表し、新研究・新発見とする弊がある。教育の事実の実績は、その1・2回の経験で確実に数量・統計に作りだされて『不変に効果あり』と認められるものではない。今少し、批判的・公平な立場になって教育を眺める自由な心になってほしい。それに経験の時間にも相当の経験あって判断する必要があります。世は1回くらいの経験から善悪を判定して発表するが、あまりに大胆に思われる。」といった言葉もあります。これも、非常に重く今も通用する言葉ではないかと思います。今は情報が早く、なんでもすぐ出すように言われますが、100年前に小岩井先生は「教育の事実に関しては、少しの経験ですぐに成果を求めるものではない」ということを言っていて、こうした気持ちをもって林間保育を実施していきました。林間保育は8月のお盆を除いてほぼ毎日森に行くのですが、小岩井先生はほぼ1人で30人ほどの子どもの面倒を見ていたようです。とても大変だったと思うのですが、その様子がわかるものが子どもの作文にありまして、林間保育に参加した3年生の女の子がこのような作文を書いています。「遊べ遊べ、仲よく遊べ、林間学校面白や。小岩井先生ご苦労だ、カワセ先生ご苦労だ、遊べ遊べ、仲よく遊べ、私たちを遊ばせて、先生一人は働いて、ほんとに先生ご苦労だ。遊べ遊べ、仲よく遊べ。」。恐らく先生は走り回って、休む暇もないくらい働いていたと思うのですが、「こうした体の弱い子たちをいかに普通の子と同じように過ごさせることができるのか」ということで、いろいろな研究・実践をかさねて実行に移していました。今、一般的には「林間学校」と言われていると思いますが、小岩井先生は『林間学校』という欧米の形式を取り入れようと思ったが、これは私のやろうとしていることと合わない。私は林間で勉強を教えるのではなくてどうにかして子どもの健康の改善をしたいということで、『林間学校』という名称は不適當で自分で『林間保育』という名称を作った」と書いてあります。「ただいたずらに西洋の模倣をするだけではなくて、自分にとって何が必要なのかをよく考えて実践に移しなさい」ということがいえると思います。

こうした先生の研究・実践というのは常に開智学校では行われていて、4番もそのひとつです。「小学校令将に実施せられんとす、我等は此時に当り空しく黙視すべきときにあらず。出来得る丈は各自互に主義を立て一校の世論を創出すべきなり。」。これを述べたのは、明治20年代に開智学校校長を務めた寄藤好實先生で、「小学校令将に実施せられんとす」とあるように、第二次小学校令が公布されたあとの職員会議で述べられた言葉です。「実施までには少し時間があるが、それまで出来得るだけ各自互いに考えて自分なりの主義を考えて開智学校としての世論を作るべきである」ということで、この言葉をもとに開智学校の先生のさまざまな研究が始まっていきます。例えば「テストの方法をどうするか」



「授業時間の配当はどのように行うべきであるか」といったことが考えられたようです。寄藤先生は教員自身の研究を非常に奨励された方で、学校に図書館を作りました。これが現在の松本中央図書館となります。信州大学や博物館もそうなのですが、開智学校の先生が研究・実践のなかで生み出した施設がそのまま松本市や長野県の教育施設になっていることから、「『学都松本』の礎は開智学校である」と言われたりします。

4番の下に「作文の教授法についての職員意見書」の言葉を載せたのですが、「大人の思想を以て作りたる文章をそのまま生徒に注入せんとす無理の次第なり～上級に上るに従い自作文の割合を多くするを要す」ということが述べられています。これも澤柳政太郎の言葉に通じるものがあるのですが、「子どもたちにいかに自分で考えさせるか」という観点がないと出てこない言葉であると思います。寄藤校長のもと、おそらく年1回、先生一人ひとりが研究テーマを設けて学年末に発表するということが行われています。これは寄藤校長が去った後も明治40年頃まで確認ができます。当時、子守教育など先生の研究・実践によるところが多かったとお話しましたが、普通の授業においても、先生はいろいろな本を読んで考え、実践に移すということがよく行われていました。一つ面白いと思った例があります。明治21年に開智学校の職員会で「小学校において体罰を施行する可否」というテーマで討論会が行われました。国の法令的に体罰が禁止されたのは1879(明治12)年のことです。教育令に「学校においては、生徒に体罰(殴る・縛るの類)を加えることはいけません」と定められています。明治23年の法令にも「校長や教員は生徒に体罰を加えてはならない」と明文化されています。それを受けて開智学校ではどうであったかというところまではわからないのですが、明治21年に職員会で「小学校において体罰を施行する可否」というテーマで討論会が行われています。「可否」とあるので、賛成派・反対派それぞれあったと思います。話し合いの記録が残っていなかったのは残念なのですが、ほかの材料から推測することができます。明治34年の開智学校の校則の遅刻した生徒の取扱いの項目に、「遅刻した生徒は黙って教室に入り、教師に黙礼し、教室の隅に立ちなさい。そのまま座ってはいけません。その後、遅刻をした事情を先生に聞かれたあと、ほかの生徒に礼をして着席しなさい。」と定められています。この条文には但し書きが付いていて、「ただし、直立、長時間にわたって処罰の状態に陥らないように注意すること」と書かれています。「遅刻をしたらすぐに座らせるのではなく、反省の時間を設けることは必要だが、処罰になってはいけません」ということが明治34年の校則で明文化されています。なかなか信じがたい例ではあるのですが、当時からすでに体罰は禁止されていて開智学校の校則にもいたずらな処罰を禁止するようなことが書かれています。ちなみに体罰にも歴史があり、体罰を生んだのは近代以降だそうです。江戸時代

までは体罰そのものがなかったとされています。江戸時代の寺子屋は、皆自分で勝手に勉強していきます。自分の進度で個別に学習をしていくという形態でした。近代になると集団的な国民性を養うためにクラスを作り、一斉教授で教育していきます。この集団性・団体行動から外れることから体罰が始まったとされています。集団性・国民性を設けるために大いに参考にされたのが、軍隊組織の規律であると言われています。なので、体罰を生んだのは近代的な学校制度であるとする研究者もいます。したがって、江戸時代までは「体罰」と言えるものはなく、今でいう「体罰」は近代以降に定まったとされています。ただし、すでに明治12年の時点で禁止されているという点は重要だと思います。

私は、戦前の教育というのは、特攻や教育勅語に表されるような「軍国主義的・国家主義的に陥った教育」と一言で片づけられる場合が未だに多いと思います。しかし、先生一人ひとりの言葉を見ていくと決してそうではないということの日頃感じています。なので、そうしたことを展示などではご紹介するようにしています。昔の先生の言葉も、今振り返ってみても参考になること、今だからこそ考えなくてはならないことがたくさんあるのではないかと思います。

最後5番目になります。これは私が、開智学校の資料が面白いと思った最初の資料です。国語の研究授業をどのように行うかを記した教案なのですが、昭和6年頃のものと考えられています。教案の最後に「教育の道に分け入ってからまだ浅い年月の流れたばかりの私は重い荷物を背にしながらほとほと草臥しかかっている旅人のようなものだ。何の定見もなく何の信念もない風羅坊にすぎない。唯ねがはくばこの細道を歩みつづけて行きたいのだ」と書かれています。「戯言を記す」としてこれを書いたのは、おそらく24、25歳の、師範学校を卒業したばかりの先生です。最初読んだときはよくわからなかったのですが、次第に「自分はこれから先、重い荷物を背負い、非常に困難な道ではあるが、ただ願わくばこの教育の道を進み続けたい」という自分の信念を書いた言葉であるということがわかりました。普通なら見落としてしまうようなところに書いてあったので、偶然見つけて内容がわかったときは、開智学校の資料、先生の言葉は本当に面白いし思いがけないところにとんでもないことが書いてあるなど感じ、それ以来注意してさまざまな資料を見るようになりました。その結果、非常に強い思い・言葉がたくさん出てきました。100年前の先生の言葉ではありますが、今後100年の学び・教育を考えるにあたって重要な言葉であるのではないかとということで今日ご紹介させていただきました。ありがとうございました。

【おはなし終了後、参加者からの質問】

【質問①】

現在裏町の近くに住んでいるのですが、料理組合が飲み屋街で教育を行っていたという話は初めて聞きました。どのあたりにあったのでしょうか。また、子どもたちが前を向いて座っていて後ろに先生がいるという写真がありました。これはどういう教育なのでしょう。

#### 【回答②】

最初に転用した建物があつたのは下横田町ですが、その後新しく立て直した場所についてははっきりとはわかっていません。また、子どもたちが先生に背を向けて座っている写真ですが、これは記念写真用にこの向きに座っていたためです。

#### 【質問②】

大変参考になりました。また、100年前の高名な先生方の言葉は非常に感慨深いと思います。澤柳政太郎さんの言葉は石碑・校訓などに残っているのでしょうか。

#### 【回答②】

澤柳政太郎さんは明治8年くらいに東京に出てしまっているので、松本近郊に校訓や石碑が残っている学校はなかったと思います。ただ、しばしば松本に来て講演をしていたので、書を書いて学校に置いていったという事はありました。おそらく山辺に書が残っていたと思いますし、開智学校にも1つ残っています。どちらかという、東京で成城小学校を作った後に多くの後進を育て、彼らが独立して自由教育系の大学がいくつもできるのですが、それらの学校には像が建てられたりしたそうです。ただ、今現在まで残っているのかは確認できていません。

#### 【感想】

レジュメ3番の「流行気分」という言葉がひっかかりまして、川合訓導事件で「気分教育」という言葉が使われていたの思うのですが、それとの関係はあるのでしょうか。

感想といたしましては、遠藤さんが行った澤柳さんの展示会はとてもよいものでした。澤柳さんがどういう人であるかよくわかっただけでなく、彼の言葉に感動した気持ちが遠藤さんの言葉に表れていてとてもよかったです。今日のお話も、具体的な資料に加えて、遠藤さんの心とともに澤柳さんや開智学校の先生の言葉が伝わってきました。ありがとうございました。

【遠藤さん】

私は単純なもので、これまでのような言葉を見つけるたびに「先生ってすごいな」と感動し、それが展示室に浸食しています。

先ほど、『気分教育』と関係しているのではないかというお話がありましたが、レジュメ 3 番の言葉と「気分教育」は全くの別物です。小岩井先生が言いたかったのは、「みんな自分で考えていろいろやっているが、それは欧米の真似をしているだけではないのか」ということです。「欧米の組織をいたずらに模倣して、その土地や学校の事情を考えずに実践するのはよくない」ということを言ったのが 3 番の言葉です。たしかに、川合訓導を取り締まる側からしたら「気分教育」といった批判、「きちんと修身の教科書を使いなさい」といった批判もあるにはあります。川合訓導が実践した内容は、彼なりの科学的な論断によって「これが一番良い」という信念をもって行った授業ですので、「気分」といったものではないと思います。